

日本語学習者の「日本語使用者」としてのインターネットを通したリソース使用に関する調査

著者	島崎 薫
雑誌名	言語科学論集
巻	14
ページ	129-142
発行年	2010-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/50685

日本語学習者の「日本語使用者」としての インターネットを通したリソース使用に関する調査

島 崎 薫

キーワード: インターネット、学習者オートノミー、リソース、日本語使用者、オーストラリア

要 旨

本研究では、ニューサウスウェールズ大学の日本語学習者を対象に、インターネットを通してどのように教室外で日本語を使用しているのかについて調査を行った。対象者はインターネットをリソースに接するためのツールとして、リソースそのものとして、そしてツールとリソースが合わさったものとして利用していた。またインターネットを通して、学習を意識している者と意識していない者がいた。以上の結果を踏まえ、教師は学習者の教室外での多様な日本語使用を認識する必要があること、そして学習者オートノミーを育成するためには、教室外での日本語使用における学習の意識化を図る取り組みが必要であると述べた。

1. 研究の背景

日本語教育の現場において、学習者のオートノミーへ注目されるようになって久しい。ここで言うところの学習者オートノミーとは、「学習者が自身の学習をコントロールする能力」のことを言う(Benson 2001; p.47)。学習者にとって、授業というのは生活の中のほんの一部にしか過ぎない。特に、教室の外では他の言語が使われている海外の学習者にとって、教室の外でいかに学ぶのかということは、彼らの学習において非常に重要な部分である。

それを踏まえ、日本語のコースでは学習者オートノミーを育てる取り組みを行っていく必要があるのだが、そのためには学習者が実際教室外でどのように日本語を学んでいるのかについて把握することは欠かせない。さらに近年、情報通信技術の著しい発展や普及によって、インターネットを使った日本語の使用が質、量ともに豊かなものになっている。それに伴い、学習者は一人の「日本語使用者」として教室外でも日本語を益々多様に使用するようになってきている(トムソン 2009)。

そこで、海外にいる学習者が「日本語使用者」として、教室外でどのように日本語を

使用しているのかを明らかにするために、本研究では学習者のリソースに注目したいと思う。

2. 先行研究

日本語教育においてリソースに関してよく引用される研究の一つにトムソン(1997)がある。トムソン(1997)では、リソースを4つ(人的リソース、物的リソース、情報サービスリソース、社会的リソース)に分類し、ジドニーという場所で使用されている具体的なリソースについて述べている。同論文では、田中・斉藤(1993)から人的リソース、物的リソース、社会的リソースを参照している他、新たに情報サービスリソースを提案している。情報サービスリソースとは、特に海外における日本関連の情報源としてのリソースで、例としては日本映画上映の情報や日本文化関連の展示会などの情報を流してくれる国際交流基金の日本文化センターや、日本関連の情報を得たり、交換したりできるインターネットであると説明している。だが、インターネットのリソースとしての使用に関しては、上記の例を出しているに留まり、具体的な内容には触れていない。さらに学習者が置かれているインターネットの環境が、この時点から大きく変化し、学習者のインターネットの使用も大きく広がっていることは言うまでもない。

また海外の学習者における教室外での活動の実態を掴む先行研究として、国立国語研究所の調査報告がある(国立国語研究所 2006)。2001年から2006年にわたってタイ(バンコク)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシアを対象に、学習者の学習環境と学習手段に関して量的調査を主に、大規模な調査が行われた。しかし現在に至るまでに、学習者を取り巻く環境が大きく変化している。例えば、国立国語研究所(2006)でインターネットに関して言及されているのは、メール、メッセージの使用や情報検索、掲示板の閲覧だけで、ソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)や無料動画サイトなどが普及している現在のような多様な使用とは全く異なる。

このようにインターネットは、情報通信技術が著しい発展を遂げるとともに広く普及し、学習者にとって身近なものになっているのに関わらず、学習者が教室外でどのようにインターネット通し、日本語であるいは日本語をめぐってリソースを使用しているのかについて十分な調査が行われているとは言えない。

3. 研究の目的と方法

本研究では、インターネットを通して学習者がどのように教室外でリソースを使用しているのかについて明らかにすることを目的とする。ここで言う「使用」とは、日本語学習のための使用だけではなく、日本語の「使用者」として日本語を使って活動したり、日本語や日本文化をめぐる活動に関わったりすることを指す。

上記の目的を踏まえ、本調査では2010年3月から6月にかけて半構造化インタビューを実施した。インターネットの使用を学習者のリソースの使用全体の中で位置づけるため、以下の6つの項目について調査を行った。その中からリソースとしてのインターネットを学習者がどのように教室外で使用しているのかについてデータを抽出していった。

- (1) どんなリソースを利用しているのか
- (2) そのリソースをいつ、どこで見つけたのか
- (3) そのリソースをいつ、どこで利用しているのか
- (4) そのリソースをどれぐらいの頻度で利用するのか
- (5) そのリソースを利用する際にどの言語を使用するか
- (6) そのリソースからどのような影響を受け、それを学習者自身がどのように評価しているのか

なお、インタビューは日本語と英語で行った。使用言語として日本語を使用した理由は、日本語のアウトプットの機会を得ることが難しい対象者の一部が、本インタビューを日本語で話す機会ととらえ、日本語でのインタビューを希望したためである。

4. 調査対象者と背景

調査は、オーストラリアのニューサウスウェールズ大学(UNSW)の大学生を対象に実施した。オーストラリアは日本語学習者数が世界で第4位であるということ、UNSWはオーストラリア最大の都市シドニーにあり、また筆者の交換留学先であったため、被験者を集めやすく調査がしやすい環境にあったということに加えて、国立国語研究所(2006)の調査では調査地点がビクトリア州に限られ、シドニーは対象外であったこと、また大学生の調査に関しては、被験者が少なかったということから決

定した。

調査対象者は表1に示した11人である。日本語履修学生全体の属性データがないため、UNSW在籍学生の属性データ及び言語背景比率に近づくよう留意して便宜的抽出法で選定した。

表1. 調査対象者の詳細

	国籍	家庭言語	性別	高校での 日本語学習	日本 1年以上	現在	年数 (年生)	専攻
A	オーストラリア	英語	男	○	×	Jr 先生 ¹	1(4)	日本語
B	オーストラリア	ベトナム語	男	○	○	修了生	2(2~3)	日本語
C	オーストラリア	英語	男	×	×	3年生	2(1~2)	英語教育 日本語
D	オーストラリア	英語 広東語	男	○	×	修了生	2(3~4)	電子工学 人文社会
E	オーストラリア	広東語	男	×	○	Jr 先生	2(1~2)	経済、日本語 心理学、経営
F	韓国	韓国語	男	○	○	修了生	2(3~4)	会計
G	香港	広東語	女	○	×	Jr 先生	2(3~4)	日本語 心理学
H	香港	広東語	男	○	×	Jr 先生	4(1~4)	教育学
I	香港	広東語	女	×	×	3年生	2(1~2)	保険統計学 日本語
J	中国	中国語	女	×	×	2年生	1(1)	日本語
K	インドネシア	インドネシア	女	×	○	4年生	2(1,3)	医学 人文社会

履修者を擁する大学UNSWは、ニューサウスウェールズ州の大学の中でも最大級の日本語教育の高等教育機関であり、2010年1セメスターには約700人が受講登録している。1年生から4年生までのコースがあり、2セメスター制で各13週のコースである。UNSWの日本語コース全体の目標は以下の3つである。

- ・ 専門的なレベルにおいて、文化的に機能的にそして文法的に適切な日本語でコミュニケーションしたり、インターアクションしたりすることができる学習者を育成する
- ・ 学習者の中において、一般的な異文化間コミュニケーション、特に日本・日本人とのコミュニケーションに対して積極的な姿勢を育てる
- ・ 学びにおけるオートノミーを示すことができ、自身の学習を継続させることができるような自律した学習者を育てる

(Japanese Studies School of Language and linguistics UNSW 2010; 訳責筆者)

コース内ではそれぞれこの目標を果たすべく、日本語の歌を紹介したり、日本語学習ウェブサイトの紹介などを行ったり、日本人や先輩学習者を招いてのビジュアルセッションを行ったりと様々なリソースとの接点を設ける工夫がなされている。

オーストラリアの主要大学の例にもれず、履修している学生の背景は非常に多様である。例えば、アジア系の学生でもオーストラリアで生まれ育った学生の中には、英語を母語としている学生もいれば、家庭では英語とは別の言語を話す学生もいる。またごく少数であるが、日本人の親を持ちながらも、オーストラリアで生まれ育った日本人の学生も学習者として履修している場合がある。履修学生の専攻も人文社会系だけではなく、商学や工学、理学、法学、医学などと多岐に渡る。

5. 結果:対象者のインターネット使用の傾向

対象者たちは、使用用途は様々だが、全員インターネットを通してリソースを使用していた。インターネットを使って自分の趣味のために活動している対象者が多く(学習者A、学習者D、学習者F、学習者G、学習者H、学習者I、学習者K)、主に視聴覚に関わるリソースが用いられていることが多かった。

周囲の人とリソースを共有している対象者もいるが、対象者にとってインターネットは身近な存在で、ほとんどすべての学習者とそのリソースに関する情報を得る手段としてもインターネットを使っていた。

「趣味」と位置付けている対象者が多いせいか、時間があるときや大学が忙しくないときにリソースを使用すると述べる対象者は多かったが(学習者C、学習者D、学習者E、学習者G、学習者H、学習者K)、何らかの形でほぼ毎日日本語触れている学習者が多い。その中でも日本の音楽の使用頻度が全体的に高い。

使用言語についてはレベルに限らず、個人の好みによる。例えば、ドラマ鑑賞で言えば、学習者Aは日本語の能力が高いにも関わらず、詳細まで知りたいという理由から字幕付きで鑑賞しているが、学習者Iは字幕がなくても内容がだいたい分かるということに喜びをもち、字幕をつけないで見ている。

リソースから受けている影響の自己評価に関しては、視聴覚リソースから聴解能力や会話能力がついたと述べている傾向があるのだが、「リソースを評価すること」に対する認識に差が見られた。趣味としている学習者にとっては、評価の対象にはあまりなっていないようであった。

6. 考察:多様化したインターネットの使用

この調査から学習者は、リソースと繋がるためのツールとして、リソースとしてもしくはその両方としてインターネットを使用していることが分かった。これは、先行研究でも同様のことが言え、国立国語研究所(2006)を参照すれば、学習者はメールやメッセージングをツールとして用いてリソースと関わりを持ち、検索エンジンを使って調べ日本語のサイトを利用したり、掲示板を参照したりしてインターネット上のリソースを利用している。本調査で明らかになったのは、そのような使用だけではなく、インターネットを通して益々豊かなリソースとの繋がりを生み出していることだ。それぞれに関して、対象者からのインタビューを用いながら整理する。なおインタビューからの引用部分では、Rは筆者を示し、括弧内は筆者の加筆である。また引用中の学習者の名前はアルファベットに置き換えた。

6-1. リソースを繋ぐツールとしてのインターネット

対象者がインターネットをツールとして使い、より豊かにリソースと繋がっていることがこの調査で明らかとなった。以前はメールやメッセージングだけであったのに対し、Skype²やSNSなどの使用を通して、リアルタイムでのより直接的なコミュニケーションやネットワークの形成を行っている。例えば、学習者Bは大学の留学生課で働いているのだが、Facebook³を5分おきにチェックしていると言い、日本語版に設定し、コメントなどでも日本語の使用頻度は高い。Youtube⁴もよく利用し、これも日本語版に設定している。学習者Cもドラマなどはほとんど見ないが、日本人の彼女がおり、Skypeでよく話す。Skypeは日本人の前の彼女から教えてもらったという。Facebookも利用しており、両方とも24時間オンラインで、携帯電話からも利用している。また学習者Jは、パーソナルアドサイトGumtree⁵に自ら言語エクステンジパートナーの情報を載せ、シドニーの別の大学に通う日本人留学生と週1回会っている。

91 R (略)何で知り合いましたか? Where did you meet at the first time?

92 J あの一、インターネット

93 R インターネット、へ〜インターネットのどんなサイトですか?

94 J あの一 site called *Gumtree*

95 R ああ、Gumtreeね、ふーん、Gumtreeでどうやって見つけましたか?

- 96 J あのー、/posted advertisement / want a exchange, language exchange,
あの人英語を…

学習者Eは、自らインターネットでJapan-guide.com⁶というパーソナルアドサイトを見つけ、そこでペンパルを見つけてメールやメッセージャーなどを通して継続的に交流を深めていた。学習者EはSNSも活用し、Facebook上で友人に別の友人を紹介してもらったり、日本に交換留学中にmixi⁷のコミュニティー機能を利用してテニスサークルを見つけ、自ら連絡をとり、参加したりしていた。

- 11 R (略) you told me you use mixi, right?
12 E Yes, ahhh
13 R Yes, mixi has some function, right?
14 E yes, I don't use it very often, but ahhh, for example, when I went to Japan, maybe first year, before I went to Japan, when I mixi to try to find some groups which I could join so ... for example, I found ahh like, before I went to exchange on my university, I did home stay two months I wanted to do something when I was home stay because my host family, they have work and they have school, so during the day is really free so I contacted group on ○○university, no group on mixi for ahhh... ○○university, tennis circle
15 R Ah, not △△ university(学習者Eの交換留学先)?
16 E because I lived in Osaka(△△ universityは大阪ではない)
17 R Uhuhuhuh
18 E During my home stay so I joined the tennis circle, yeah also finding the other groups, when I went to Tokyo I found it another tennis circle.
19 R Uhhh, so you find some group on the mixi, and then make friends and meet directly, I mean in real life
20 E Yeah, yes yes(略)

6-2. リソースとしてのインターネット

この調査では、インターネットが対象者により豊かなリソースを提供しているこ

とが明らかとなった。以前は検索エンジンを使用して日本語のサイトを見る、もしくは掲示板などを閲覧するというのが中心的な使用方法だったのに対し、今回の調査で対象者たちは、動画や音楽など視聴覚に関するリソースを多く使用していることが分かった⁸。

例えば学習者Dは現在は自分の専門が忙しいため、ドラマなどはほとんど鑑賞できなくなったが、日本の音楽は毎日聴く。オリコンチャートで新しい歌を調べ、歌詞が理解できるようになるまで何度も繰り返して聴く。学習者Hは友人とドラマとアニメで役割分担をしてダウンロードし、鑑賞している。オリコンチャートを参照し、日本の音楽もよく聴く。今日本で人気のある曲を知ることができるだけではなく、今まで知らなかった曲や新しい曲にも触れることができるからだという。

93 H (略)なんかオリコンのアルバムをダウンロードして、ああ、知らない名前をして、を見て、そして聴いて、一度聴いてはどうですかーと聴くとこのリズムはいい、とかああ、うん

94 R オリコンをダウンロードして、そこからいろいろ聴いてみていいのを見けるってということですか？

95 H はい自分であんまりリサーチはあんまり、しないですから

学習者FはYoutubeでよく日本のバラエティー番組を見る。学習者Fのパソコンは常にインターネットに繋がっており、日本のバラエティーなどの動画を常にダウンロードしている。学習者Iは、11人の対象者の中でもっとも多くの種類のリソースを使っている。2人の日本語学習者と一緒に住んでおり、リソースをよく共有する。特にドラマに関しては、インターネットで現在日本で放映中のものについて調べ、日本での放送と同時進行で見ており、現在は5つのドラマを見ている。学習者Gは兄、姉、弟も日本語を学んでおり、兄とは、兄がダウンロードしたバラエティーやアニメと一緒に見ている。学習者Aはドラマやアニメ、小説といったリソースを趣味でよく使用するのだが、それぞれの映画化や漫画化、ゲーム化などの情報をインターネット上で得、そこからその映画や漫画を見たり、原作を見たり読んだりしている。

6-3. ツールとリソースとしてのインターネット

ツールとして使用すると同時に、リソースとして利用している複合的なパターン

でも、対象者がインターネットを使用していることが分かった。

例えば、学習者Fは、インターネットオークションに参加し、オンラインショッピングをしている。インターネットを利用して他者とやり取りしている他に、買い物という行為をインターネット上で行っている。この他、学習者JはUNSWの教員にLang-8⁹を紹介してもらい、2週間に1回程度200字程度の日記を書き、アップデートしている。このサイトを通じて他者と交流しながら、このサイトで日本語を学んでいると述べた。

7. 考察: 学びに対する意識

この調査から学習者のインターネットの使用を通しての学びに対する意識の違いも明らかになった。同じように使用しているが、学習者によって学習が意識化されている場合とされていない場合がある。

学習者Aや学習者B、学習者C、学習者D、学習者F、学習者G、学習者I、学習者Kは、日本語を使用し、リソースを使っている際、主にそこからの日本語学習をあまり意識していなかった。学習者Bや学習者Cのように日常生活の中でのコミュニケーション手段として溶け込んでいたり、学習者Dが言及しているように趣味として物的リソースに触れたりするがゆえに、そこでの学びはあまり意識されないようである。学習者Dは来年交換留学を考えているが、今は日本語を履修しておらず、「日本語の勉強は続けていない」といい、日本語でのリソース使用は「趣味」として位置づけられている。

3 D (略)今日はDさんが日常生活でどんなふうに日本語を使っているのかって
いうことを聞きたいんですけど、いつ、どんな場面で日本語を使いますか？

4 R うーん…まあ、普通にもう久しぶりに使わなかった でもなんか、あの勉強
の終わったから今まで、日本語を使わなかった だって使う場所もないし、
機会もないし、うーん、時々漫画とかドラマとか見ると読むけど、あんーそ
れ以外は日本語はあまりしゃべりません

85 R じゃあこれって、(日本語の) 3年生って、いつやりましたか？

86 D これは2年生の時始めました 高校、あ、僕の専攻は電気工学とアーツ(日本語を含む人文社会)ですから、電気工学の方は集中して、アーツはまあなんか、趣味だから、1年生の時は全部工学部の勉強をした

しかしリソースを使用し、自分の日本語能力に変化が現れたことで、結果としてリソース使用に対する評価を行った対象者はいる。学習者Kがよい例である。学習者Kは医学専攻のため日本語を1年しか履修出来なかった。1年生を履修した後、1年間日本のドラマをたくさん視聴した。翌年日本語を副専攻にした際には、2年生を飛ばし、日本語3年生から再開することができた。その1年間、学習者Kは特に学習を目的としてドラマを視聴していたわけではなかったが、結果として3年生を履修するだけの能力がついていたようだ。

また学習者Gも高校から日本語を学んできた経験を踏まえ、サブタイトルで確認しながらアニメやコメディーを見ることで、リスニング力がついたと述べている。

- 151 G (略) 私にとっては、一番効果があった、まあ勉強方法かな？実はアニメのまあ、言葉を聞いて、そしてサブタイトルを見て、この言葉はこんな意味があるって感じですね それと、まあJポップとか、コメディショーとか、まあそれは耳のトレーニングになるみたいでー、えっとそれでー、日常にも日本人の友達とかー、そういうしゃべっているときに、えっとーそんなに難しくないんですよ聴くときは、はい

しかし、一方で、次のようにも述べている

- 465 R (略) 今日本語の勉強ってしてますか？
 466 G えっと今学期は(授業を)とってないんです
 467 R ああ、とってない？ああそうなんですか…
 468 G メジャーはもう終わったのでー
 469 R 終わっちゃったんですか…ああそうなんですかー
 470 G はい
 471 R じゃあまったくもう全然自分の日本語の勉強っていうのはしていない？
日本語は…
 472 G えーたぶん、ゲームとかJポップとか聞くときにはまあ、練習とかできませんが、大体はしゃべってない…ときはまあ、あまりしゃべってないので忘れ
ました

彼らは確かにリソースの効果や自分の日本語能力に与えた影響に関して言及している。しかし、あくまでもリソースの使用自体が目的で、その副産物として起きた結果としての学びについて述べているだけである。学習者Gのインタビューからも、主となっているのはそのリソースを使うことであり、それが日本語の練習にもなっていたと学習を副産物的に捉えていることが分かる。だが、その経験を踏まえ、いかにリソースを活用し、学習するのかといったような自身の学びに還元してはいない。

一方、学習者Eや学習者H、学習者Jはリソースを使用する際に、自身の学びを常に意識している。例えば学習者Jはまだ2年生であるのにも関わらず、日常生活での日本語使用をなるべく学びに繋げようと意識している。学習者Jの場合、翌年に日本への交換留学を希望しており、具体的な目標があることが大きな影響を与えていると考えられる。言語教育を学んでいる学習者Hは、現在の学習に関する問いに対してリソースの使用例を挙げ、4技能に分類しながら学習と位置付けている。しかし、彼の場合、使用を通じた学習について認識があるにも関わらず、学習をあまりしていないと述べている。

384 R (略)今、日本語の勉強の話になるんですけど、日本語の勉強ってしてますか？

385 H 今でも？

386 R うん

387 H あ、少し、あんまり、あー前より今はあんまりね

388 R あんまりないですかー？どんな勉強してますかー？

389 H まー自分で、んとー、本を読む…んとーええとー聞くのはたぶんドラマとか、音楽から、を練習だとー、ええとー、かう(書く)のはたぶん友達にチャットをー

学習者Eはリソースがもたらす効果や影響を評価し、自分の学習活動に活かしていた。学習者Eは学部4年生で自分の専門が忙しく、留学前に比べ現在全般的にあまりリソースを活用していないが、忙しくなる前は、リソースを使う時はその活動を通してどのような学びが起こるのかを考え、なおかつその学びに対する評価を行っていた。そのため、他の学習者よりもリソースにおける日本語の使用に目が向けられており、インタビューの中でも、非常に幅広いリソースをあげ、それらの具体的な使用

方法や効果についても言及していた。学習者EのJapan-guide.comについての語りがまさにそうである。

313 R And what did you do with pen pal? Like exchange languages. . like you teach English to them and they teach...

314 E ah, actually I...it was more kind of like Japanese version of 英会話 except I didn't really pay them we were just kind of friends! Just talk to them sometime in English something in Japanese. I tried to say in Japanese if I knew how to say in Japanese and I hadn't known how to say, I would say in English and then sometime I ask them likeこれなんて言うの? and then they would tell me and then sometime I ask them これあってる?....

315 R ん〜なるほどね、んーそっかそっか

316 E Yeah, I think it's very good way to study

396 E (略)I think that talking to pen pal is definitely helpful, one is more interesting, and two ummmm, like you can always get feedback and, you don't have to wait, specially on chat you can get instant response, if you write, if you hand it in your assignment, a few weeks later, you don't remember what the problems were

つまり学習者Eは、学習者オートノミーを発揮し、自身の学習をコントロールしていると言える。

8. 教育への示唆

以上のように、学習者たちはインターネットを通して、先行研究よりも多様なリソースに触れ、そして繋がっている。しかしそれらを利用していく上での、学習者の意識は異なり、それが学習者オートノミーにも影響していた。ここでは、本研究で得た知見を踏まえ、今後教育の現場にどのように生かしていくことができるのかについて考えていきたい。

まず、教師は学習者が主にインターネットを通じて、日常的にこれだけ多様に日本

語を使用しており、そしてその中で授業という時間はほんの一部にしか過ぎないということを心に留めておく必要があると思う。そして、学習者がどのような目的を持っているのかによって、日本語の使用を通しての学習に対する意識の違いがあり、結果としてそれは学習者オートノミーの発揮に影響している。インターネットに関しては、趣味や娯楽を楽しむための単なる言語的手段として日本語使用している学習者も多い。彼らは、使用の際の学習に対する意識は低い。

授業やコースというものは、終わりがあがる。学習者オートノミーを目指すなら、それらが終わった後でも学習者が自身で学び続けていけるようになっている必要がある。そのためには、学習の意識化が大きな鍵になるように思う。学習者Eは自身の学びを意識的に捉え、リソースに対して評価し、そしてその評価に基づいてそれらをコントロールしながら学んでいた(I 313 ~ E 316, E 396)。まず、自身に起きている学びを意識化することが第一歩になっていることは、学習者E、学習者H、学習者Jの例から分かる。つまり、教室外での日本語を使った活動における学びについて授業内で意識化を図ることは、学習者オートノミーを促し、授業内外の連携を図るための取り組みになると考えられる。

9. 結論

本研究では、UNSWの日本語学習者を対象に、インターネットの使用を通してどのように教室外で日本語を使用しているのかについて調査を行った。対象者はインターネットをリソースに接するためのツールとして、リソースそのものとして、そしてツールとリソースが合わさったものとして利用していた。またインターネットの使用を通して、学習を意識している者と意識していない者がいた。以上の結果を踏まえ、教師はまず学習者の教室外での多様な日本語使用を認識する必要があること、そして学習者オートノミーを育成するためには、教室外での日本語使用における学習の意識化を図る取り組みが必要であると述べた。

本調査では、学習者の学習リソースの使用の一端を見、学習者自身の評価から学習者のリソースの使用を通しての学びについて捉えた。しかし、リソースの使用が学びにどのように関係しているのかということは、学習者の視点からだけではなく言語習得の視点から調査される必要がある。学習者オートノミーも同様に、リソース使用との関係性についてさらに調査する必要があると考える。

注

- ¹ジュニア先生(表内では「Jr先生」と表記)とは、1年生のコースのサポーターで、日本語コースの上級生やコースの修了生、日本に交換留学した学生などが務める。今回の対象者はコースの修了生のみである。
- ²インターネット電話サービスの1つで、Skypeユーザー間で、無制限の無料音声通信が可能である。またインスタントメッセージやテレビ電話も可能である。<<http://www.skype.com/>>
- ³世界最大のSNSである。Facebook自体に共通の友人が多い人を紹介する機能があり、それを利用して友人の友人と知り合いになったり、Facebook上で友人に別の友人を紹介してもらったりすることが可能である。また大学ごとや大学の中でも専攻ごとにグループがあり、そこで他に日本語を学習している学生を探すことも可能である。大学のサークル等が運営するグループもある。<<http://www.facebook.com/>>
- ⁴無料動画共有サイト。動画を配信したり、他の人が載せた動画を視聴したりすることができる。<<http://www.youtube.com/>>
- ⁵個人広告を投稿、検索、閲覧できるオーストラリアのパーソナルアドサイトである。個人間の物品売買、求人、イベントの告知の他、人的リソースとして言語エクステンジパートナーを探すこともできる。また日本語の家庭教師をするという広告も数多く出ている。<<http://sydney.gumtree.com.au/>>
- ⁶日本を訪れる外国人のための総合案内サイトともいえるウェブサイトで、ホテルの予約や観光名所案内、イベント案内の他、パーソナルアド機能もついており、日本人と友人になることもできる。Gumtreeとの違いは、ここに登録している日本人の大半は日本に在住している日本人であるという点である。<<http://www.japan-guide.com/>>
- ⁷日本最大級のシェアを持つSNSである。Facebookで言うところのグループに当たる、コミュニティと呼ばれるものがあり、Facebook同様、人的リソースを探すことができる。<<http://mixi.jp/>>
- ⁸筆者はインターネット上に無断で他人の知的財産を載せたり、それをダウンロードしたりすることの違法性を認識しているが、本インタビューでは対象者に対してその違法性を指摘したり、改めるように働きかけることはしなかった。
- ⁹ウェブサイトに登録し学習中の言葉でそのサイト上で文章を書くと、登録している母語話者が添削してくれるというもので、その代わりに自分の母語で他の人の文章を添削するという仕組みのウェブサイトである。<<http://lang-8.com/>>

引用文献

- Benson, P. (2001) *Teaching and Researching Autonomy in Language Learning*, Longman (London).
- 国立国語研究所 (2006) 「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外調査報告書」.
- 田中望・斉藤里美 (1993) 「日本語教育の理論と実際」大修館書店.
- トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』7号, 国際交流基金, pp. 17-29.
- トムソン木下千尋 (2009) 「教室内学習と教室外学習の連携、海外の日本語学習者の場合」, 『2009年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp. 188-193.
- Japanese Studies School of Language and linguistics, The University of New South Wales (2010) "Introductory Japanese B Course Outline ARTS1631" <http://languages.arts.unsw.edu.au/media/File/FINAL_ARTS1631_IntroductoryJapaneseB.pdf>, 2010年9月30日閲覧.